



JICHI MEDICAL UNIVERSITY
SAITAMA MEDICAL CENTER
自治医科大学

さいたま医療センターだより

TEL.048-647-2111 FAX.048-648-5180 URL : <http://www.jichi.ac.jp/center>

特別号
平成21年10月1日発行

センターだより 特別号 ご案内

- 産科および周産期医療開設1周年を迎えて
- 小児科の診療開始から1年が経過して



「産科および周産期医療開設1周年を迎えて」

産婦人科 科長 今野 良 教授

1989年にスタートした自治医科大学附属さいたま医療センターは本年で20周年を迎えます。また、私たち産婦人科はその10年後1999年に婦人科のみで診療を開始しました。そして、2008年10月に産科および小児科とともに周産期の医療を開始し、1年が経過しました。

地域の皆様および医師会の先生方には、従来の婦人科と同様に産科の診療におきましても多大なご理解ご支援を賜りまして無事に1周年を迎えることができました。

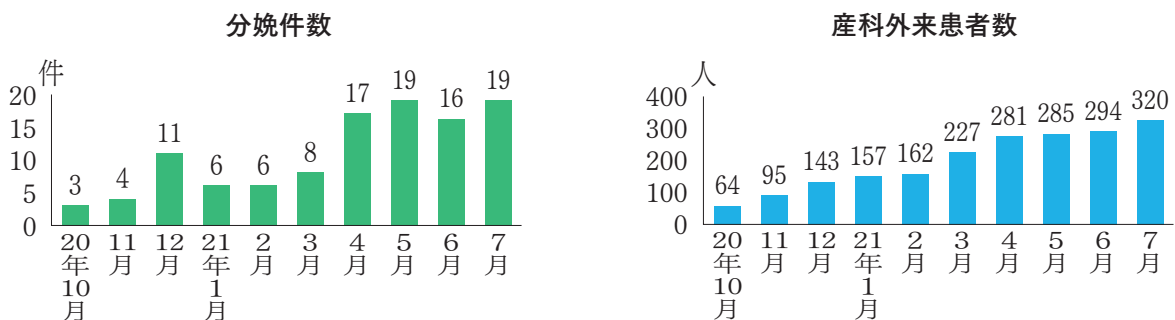
全国的な医師不足、特に産婦人科、小児科医不足の中での産科・周産期医療の開設でありますので、多大な困難が伴いましたが、院内の各部門のご尽力と産婦人科スタッフの努力によってつがなく、診療が軌道に乗ってきております。

産婦人科・周産期診療を運営するためには、産婦人科医も日々努力を重ねていますが、そのほかに様々な関連部門や多くの方々のご協力をいただいております。

昨年までは院内に助産師や新生児・小児を専門とする看護師がいませんでした。もちろん、小児科医・新生児科医もいませんでした。赤ちゃんや小児を入院させるための病室や小さなベッドもありませんでした。レントゲン写真撮影や採血のためにも、妊婦や小児専用のものを準備する必要があります。産科や小児科の待合室は他の患者さんと別にする必要があります。診察室や診察台など専用のものを揃えました。胎児が元気であるかどうか検査するための超音波検査機器や胎児心拍監視装置、陣痛や分娩の状況を観察するための特殊なモニターも必要でした。産科だけで使用する特殊な薬剤も必要です。また、新生児や小児には成人向けの薬は使用できません。専用の薬を少量だけ投与する必要があります。分娩室や陣痛室、母体と胎児のための集中治療室(MFICU)を準備しました。産科外来には常に助産師がいて妊婦さんに対応しています。助産師は妊婦さんに付きっきりで、安全な分娩が進行するように配慮をします。母児に何らかの異常が

ある場合には帝王切開が必要です。帝王切開のための特別な機械を手術室に準備しました。麻酔科医や手術室看護師は帝王切開のための研修を重ねました。帝王切開の際には小児科医が新生児を迎えに来て、手厚い処置をして小児科病棟へ運びます。産後のお母さんたちには栄養価の高い産褥の給食を提供します。新生児には体重に応じて計量されたミルクが毎食（1日に8回も）栄養部から送られてきます。もちろん、母乳栄養が基本なので母児同室とし、助産師は母乳がたくさん出るようケアします。病気のために特殊なミルクしか飲めない子供のための専用ミルクも準備しました。元気に退院を迎えるお母さんと赤ちゃんのためにお祝膳を提供しています。受付から会計まで、また、出産育児一時金の調整や計算など事務の専門家が新しいシステムを作り日々の業務に取り組んでいます。医療福祉相談室では様々な悩み事・困り事の相談を受け付けています。一方、従来から行っている婦人科診療はさらに多忙を極めています。10年前には婦人科の手術は週に1件程度でした。それが今は週に10件、多いときは15件にもなっています。埼玉県は全国でもっとも産婦人科医の少ない県です。がんの手術や内視鏡手術など難しい手術を扱っている医療機関は人口の割にはとても少ないのです。

このように、たくさんの準備をして産科の診療がはじまり、無事1年が経過しました。7月にはめでたく100人目の赤ちゃんが誕生しました。1年間の産科の患者数および分娩件数の推移をグラフにしますが、おかげさまで着実な増加を示しています。



- 現在の産婦人科診療は常勤医8名、非常勤医3名で運営しています。
- 初めての外来受診の際には紹介状をお持ちください。
- 分娩ご希望の方は里帰りも含め妊娠16週までに受診し、予約をしていただきます。
- 救急搬送：当科未受診妊婦さん個人の救急は受付いたしません。ただし、他医療機関からの搬送の申し出があった場合、特に母体合併症などは積極的にお引き受いたします。病室の状況、母児の状況によっては難しいこともあります。
- 病棟：産科は南館4B病棟、婦人科は南館5B病棟です。とくに、産科では個室を多くし、産後の母児の静養がゆっくりできるようにアメニティにも配慮しています。快適で安心な質の高い産科診療を提供します。
- 地域医療機関との連携
診療体制の整備状況に応じて、ハイリスク妊娠・分娩の取り扱いを増やして、地域の医療機関との役割分担を行ってまいります。また、母親学級、症例検討会、研究会、セミナーの開催を通してさらなる地域医療への貢献を目指します。

皆様のご期待にできるだけ添えるよう鋭意努力してまいりますので、今後ともよろしくご理解ご支援のほどお願いいたします。



産婦人科医師



産科助産師・看護師



小児科の診療開始から1年が経過して

小児科 科長 市橋 光 教授

はじめに

昨今の報道で指摘されているように、日本は絶対的な医師不足の状態であり、その中でも特に小児・周産期医療は、崩壊の危機に直面しています。埼玉県でも小児・周産期医療は深刻な状況にあり、その対策の一環として当センターが小児医療に取り組むことが必要不可欠となり、平成20年10月から自治医科大学附属さいたま医療センターに小児科が開設され、同時に開設された産科とともに、周産期医療も担うことになりました。

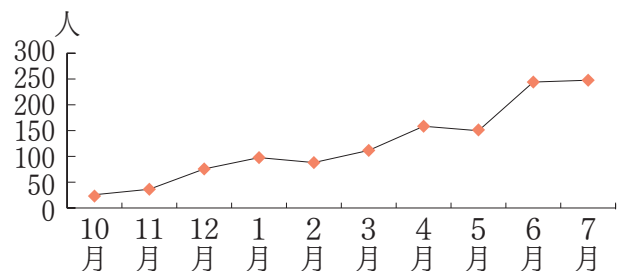
診療体制

診療開始時は4名の医師でしたが、2009年4月から2名、7月から1名が加わりました。その他、数名の非常勤医員の診療協力を得ています。

1) 外来

自治医科大学附属さいたま医療センターは、基本的に紹介患者を対象とした診療を行っていますが、小児科も同様です。午前中の一般外来の他、心臓・神経・発達・新生児の専門外来診療を行っています。また、基礎疾患やアレルギーを有するお子さんの予防接種を積極的に実施しています。小児科の診療開始から2009年7月までの外来患者数の推移を示します(図1)。小児科は急性疾患の受診が大多数を占め

図1 月別外来患者数

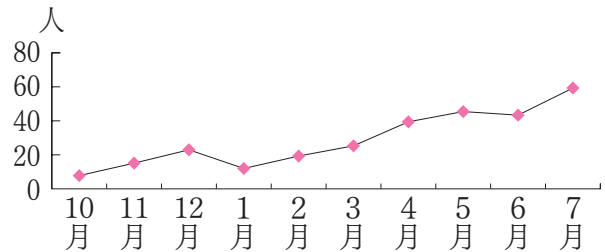


るため、当センターの紹介患者中心の外来の場合、患者数は一般病院と比較しむしろ少ないですが、増加傾向が続いています。これは紹介数の増加を意味し、二次医療機関として地域小児医療の重要な役割を担いつつあることを示しています。

2) 病棟

小児病棟36床、新生児病棟24床の設備を有していますが、当初は小児病棟の28床のみがオープンしました。病棟には保育士が常在し、子どもたちの保育を行っています。現在は、小児病棟の1～2部屋（6～10床）を新生児病床として使用していますが、2010年に新生児病棟をオープンする予定です。小児科開設から2009年7月までの入院患者数の推移は、増加傾向が続いています（図2）。新生児は、当初は院内出生児のみを治療対象とする予定でしたが、地域から強い要請もあって、院外出生児も可能な限り受け入れています。

図2 月別入院患者数



3) その他

毎週水曜日の夜間当直帯は、さいたま市の小児救急医療における2次救急輪番制の施設として、救急車や一次救急医療施設からの紹介患者を受け入れています。また、平日の診療時間内の救急搬送患者の受け入れも行っています。

今後の展望

日本小児科学会は、これからの小児医療のモデルとして地域小児医療センター構想を提案しています。これは、小児救急医療と周産期医療を実践できる地域小児医療の核となる医療施設です。

自治医科大学附属さいたま医療センター小児科は、まさに地域小児医療センターとしての機能を担うべく、発展していく必要があると考えています。具体的には2つの項目があります。その1つ目は、小児救急医療を充実させるべく、さいたま市の小児救急医療体制において、さらなる貢献をしていくことです。2つ目は新生児（周産期）医療の充実です。2010年に新生児病棟を開く予定ですが、地域からの要望も強いため、できるだけ迅速に発展を続ける必要があります。

診療開始から僅か1年しか経っていませんが、診療内容は徐々にではありますが確実に充実しつつあります。しかし、道のりはまだまだ遠いので、これからも不断の努力をしていく覚悟です。今後とも、みなさんのご理解とご協力をお願いいたします。



小児科医師



小児科看護師